
表死された二人(改)

ユン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表死された二人（改）

【Nコード】

N9370Y

【作者名】

ユン

【あらすじ】

これは『NARUTO』の世界のとある少女と少年のお話。

少女と少年は…噂の中で…懸命に…二人だけで頑張っていく…。

噂を流した人は…少女の肉親かそれとも…。

チートです…多分。

主人公は少女です…いや…二人です…。

原作潰しあります…。

一話一話が短いかも…多分。

作者ユン

1・出会った二人

少女「ねえ…なんであの子…避けられてるの？」

男「あの子？…ああ…あの子か…あの子については何も言えん」

少女「なんで？」

男「そういう決まりだ！」

少女「…私…あの子と…仲良くしたい！ダメ？お父さん？」

お父さんと呼ばれた男は少女の言葉を聞き、少女を殴った…いや…平手打ちをした。

父「ふざけんな！仲良くしたいだと！彼奴は…！」

父と呼ばれた男は何かに気づき、口を噤む。

父「…帰るぞ！…いの！」

少女は平手打ちされた頬を摩りながら父の後ろについて行った。

少女…いの…山中いの。

いののは父の後ろをついて家に帰ると…母が娘の頬を見て驚いていた。

母「いの！誰にやられたの！」

いの「お父さん」

母「あなた！なんで…いのを！」

父「彼奴と仲良くしたいと言ったからだ！」

母「っな！」

いの「なんで…あの子と仲良くなったらダメなの！あの子が何かしたの！…あの子が！」

父・母「っ！？」

いの「あの子が何かしたの！教えてよ！教えてくれないのなら…言う事聞かないから！」

母「いの…あの子については…極秘とされているの…だから…言えないわ…いの…ごめんね…」

母はそう小さく言い、いのをなだめようと頭を撫でようとした。

いの「触らないで！…お父さんもお母さんも…大嫌い！」

いのは母の手を払いのけ、家を出ていった。

母「いの！」

父「…母さん…止めるな…好きにさせてやれ」

母「でも！」

いの「お父さんもお母さんも…なんで…あの子がおかしたの！…あの子は…私と同じくらいの子供じゃない！なのに…避けらるなんて…悲しすぎる！」

私は家から離れた場所で小さく叫んでいた。

少年「同情？」

後ろから突然声をかけられた。

振り向くと少年が立っていた。

いの「あ…君は…！ど、同情なんかじゃない！私は君と仲良くしたいって心から思った！」

少年「…本当に？」

いの「本当よ！」

少年「友だちになってくれる？」

いの「当たり前！君と友だちになって仲良くしたい！」

少年「ありがとうつてば！…あ…俺つてば…うずまき ナルト…宜しくつてば！」

いの「ナルト…私は…山中 いの！宜しく！ナルト！」

挨拶をして笑いあう二人を影で見ている者がいた。

？「ナルト…良かったのう…」

その者の名は…三代目 火影・猿飛ヒルゼン。

火影「誰かおらぬか？」

暗部「つは！火影様何か！」

火影「ナルトといのを此処に連れて来い」

暗部「え…は、はい！承知いたしました！」

暗部は火影の言葉を聞き、姿を消した。

その後、ナルトといのは暗部に連れられて火影の元へやって来た。
ナルト「火影のじーちゃん！どうしたんだってば？」

いの「あ、あの…何か？」

火影「何、お主たちにある提案をな…」

ナルト・いの「提案？」

火影「お主たち…二人だけで暮らしたりしてみんか？」

ナルト「え？」

いの「良いんですか？」

火影「お主たちが良いのならのお？」

ナルト「いのと二人だけで」

いの「私は…良いよ！ナルトと暮らしたい！」

火影「ナルトはどうじゃ？」

ナルト「いのと…暮らしたい！」

火影「決まりじゃのう」

そして二人だけで暮らす事に決めたナルトといの。

二人の住まいは…なんと…”死の森”だった。

ナルト「此処で暮らすんだな…いのと」

いの「うん…二人だけで」

ナルト「怖い？」

いの「ナルトと一緒にだから…平気」

ナルト「いの…俺もいのと一緒にだから…平気だ…」

ナルトと私は…”死の森”を歩いていた。

ナルト「いの…これからどうする？」

いの「取り敢えず…住処を探そうか…ねえ…其処の暗部さん！」

暗部「っ！？」

私は振り返り私たちを監視していた暗部に声をかけた。

暗部「…なんだ？」

私が声をかけた暗部は姿を出し、要件を聞く。
いの「死の森”には住処になりそうな場所ってあるの？」

暗部「住処になりそうな場所…森の中央部に”死の森”を監視する場所ならある」

暗部はいのの問いに答える。

いの「ありがとうございます…じゃあ、其処に行こ！ナルト」

ナルト「ああ」

暗部「…」

私とナルトは暗部の人を置いてどんどんと”死の森”を歩いていった。

大分歩いたのか”死の森”に入って今、ある程度広い場所についた。
ナルト「…まだまだ先はありそうだな？」

いの「うん…此処らで食料を探さないとね？」

ナルト「暗部の兄ちゃん…いる？」

今度はナルトが暗部に話し掛ける。

暗部「…なんだ？」

いの「この辺に川とかあるの？」

暗部「…ある」

いの「何処に？」

暗部「…ついて来い」

私とナルトは暗部のお兄さんについて行った。

ついて行くと…川底がある程度ある川がありました。

ナルト「いの…川で何するの？」

いの「ナルト…釣りでしょ…この場合」

ナルト「どうやって？」

いの「そうだなあ…あ！…ちょっと待ってて！」

いのはそう言いその場を離れた。

ナルト「…」

暗部「…」

私がその場を離れ…尖った石と綺麗に真っ直ぐ伸びた木をとってき
ました。

そして、近くの木に巻きついてあったツルを使い…槍の完成！

ナルト「いのつてば！すげーな！」

暗部「…」

いの「まあね」

その日、いのは魚を6匹捕まえた。

いの「はい、ナルト…暗部の兄ちゃん」

暗部「え…くれるのか？」

いの「うん、だって暗部の兄ちゃんがこの場所教えてくれたんだか
ら、当たり前じゃないですか！」

暗部「当たり前…か。…ありがとう」

三人で食事をした後、暗部の兄ちゃんは…姿を消した。

いの（多分、火影様に報告かな）

そんな感じで”死の森”での生活が始まった。

2・二人＋αの生活と火影様と噂と提案

”死の森”にやってきて3日目になった頃、私とナルトの目の前に数名の暗部の姿が現れた。

ナルト「っな！暗部の兄ちゃんがいつぱい！」

いの「ナルト…落ち着いて…暗部さんたち…何か用ですか？」

？「ナルト、いの…驚かせたのう…」

ナルト・いの「あ！火影のじーちゃん！」

火影「どうじゃ…」死の森”の生活は？」

いの「はい！この暗部の兄ちゃんのお陰で…充実しています！」

火影「ほう…充実とな…それは良い事じゃ！」

ナルト「火影のじーちゃん？今日はどうしたんだってば？」

火影「なあに…お主らが元気にしているか気になってのう…」

いの「…遠眼鏡の術で見ているのかと…」

火影「っな！…いの…それは…何処で？」

いの「…禁則事項です！」

ナルト「いの…禁則事項ってなんだってば？」

いの「…秘密って言う意味だよ…ナルト」

ナルト「へえ…そんな言葉があるんだ！」

火影「話進めても良いか？」

ナルト「え？」

いの「…どうぞ」

そう言い木の根に腰掛ける火影といの・ナルト。

火影「実はのう…里の者が…お主らが死んだつと言うデマを流したのじゃ…」

ナルト「え？」

いの「…そうですか」

火影「ワシがその噂を聞いたのはつい今朝方じゃ…もう里の皆は噂

を聞いておる」

いの「では…そのまま宜しいのでは？」

火影「え…そのままで？」

いの「はい！だってその方がナルトの為にもなるのでは？」

ナルト「俺の為にも？」

いの「…父さんにナルトの事を聞いても極秘とか言っではいけないって言われていました…ナルトには何か秘密にしないといけない事があるんですね？」

火影「…まあ…間違いでは無いのう」

暗部「火影様…」

いの「それが何かは聞きません！…でも…ある提案を承諾して下さい！」

火影「ある提案？…なんじゃ？」

いの「はい！…一つ、今流れている噂はそのままで！…二つ、私とナルトに”死の森”で修行をさせる…3つ、6歳になったらアカデミーに入学させて下さい！」

いのは火影の目を真っ直ぐ見て言い放った。

火影「”死の森”で修行…アカデミーに入学…良かろう…しかし、アカデミーで死んでいない事がバレルぞ？」

いの「偽名を使います」

火影「偽名か…良いのか？」

ナルト「俺はイイつてばよ？」

いの「構いません！」

火影「どんな偽名にするかのう？」

ナルト「いの…決めてイイよ？」

いの「…ナルトは山守^{ヤマモリ} 那路^{ナル}で…私は…山守^{ヤマモリ} 乃衣^{ノイ}と名乗ります。

ナルト「イイじゃん！カッコいいつてば！」

火影「良かろう…修行じゃが…二人だけとは…」

いの「暗部の兄ちゃん！宜しく願います！」

暗部「え？…ほ、火影様？」

暗部の兄ちゃんは火影のじーちゃんに助けを求めるが…

火影「ほう…それは良い！」

暗部「そんなあ…」

いの「…ダメ？」

いのは首を傾げ暗部の兄ちゃんを見上げた。

暗部「う…」

火影「…観念せい」

暗部「…わ、分かりました…やります」

ナルト・いの「やった！」

そして、数名の暗部は姿を消し、火影のじーちゃんと暗部の兄ちゃんだけが残った。

火影「では…自己紹介つといこうかの？」

そう言い暗部の兄ちゃんを見る火影のじーちゃん。

暗部「はい…那路…乃衣、俺の名ははたけ カカシだ…まあ…それ以外の事はこれから自分たちで…知ってくれ」

那路・乃衣「はい！カカシ兄ちゃん！」

二人は笑顔で答えた。

火影「じゃあワシも里へ帰るとするかろう」

那路・乃衣「えっー！」

火影「仕事があるから…また会いにくるから、それまで元気にのう…」

那路「分かったってば！」

乃衣「はい！」

そう言い火影のじーちゃんは姿を消した。

カカシ「んじゃあ…早速…修行したいか？」

乃衣「うん！お願いします！」

那路「うん！宜しくってば！」

カカシ「んじゃあ…そうだなあ…チャクラコントロールでも…始めるか！」

那路・乃衣「はい！」

そう言いカカシ兄ちゃん足にチャクラを集め、足だけで木を登っていった。

那路「おお！すげーってば！」

乃衣「出来るかな？」

そう言っている間にカカシ兄ちゃんは5m上まで登り…

カカシ「まずは此処まで！徐々に高さをあげていこうか？」

那路「はい！…まず、足にチャクラを…そして…登る」

乃衣「…すーう…チャクラを足に…はあ…うん…行こ」

那路は2mで落ちた。

乃衣は4mでバランスを崩した。

那路「け、結構…難しいってば！」

乃衣「まずは集中が必要かも…」

それから二人は別々の修行方法を行った。

那路はがむしやらに…。

乃衣は瞑想し集中力をあげていった。

カカシ「それぞれ自分にあった修行方法だな…」

その二日後、なんと二人は15mまで登っていった。

カカシ「成長早！まあ…まだ3つ…俺も頑張らんとな」

それから半年…那路・乃衣は凄まじい程の早さで術などを覚えていった。

3・偽名と引越し

カカシ兄さんに”死の森”で修行を見てもらう事…3年の月日が経った。

那路「乃衣…約束の時期だな…」

乃衣「ええ…そうね」

カカシ「さて…火影様の何処に行くか？二人とも？」

那路・乃衣「はい！」

私と那路、カカシ兄さんと火影の場所へ瞬身の術で向かった。

因みにこの時、那路の口癖「つてば」は無くなりました！

瞬身の術で火影の屋敷に着くと、数名の暗部と三代目 火影が待っていた。

火影「おお…那路、乃衣！久々だのう…元気そうだ」

那路「火影様…お久しぶりです！」

乃衣「火影様もお元気そうで何よりです！」

6歳と思えない程の礼儀を見せる二人に火影は涙ぐむ。

カカシ「火影様…約束の時期になりましたので…二人を連れて来ました…」

火影「おお…カカシよ…ご苦労であつたな…どうじゃ？二人の成長ぶりは…？」

カカシ「…まあ…暗部レベルぐらいですかね…一応…私の通名で…忍術も体術も教えましたから…」

暗部ら「我々レベル…」

火影「…やり過ぎじゃないか？」

カカシ「何せ…初めてなもので…」

カカシ兄さんは苦笑いする。

乃衣「あの…約束…」

火影「おお…そうじゃったのう…実はもう登録は済ませてある…」
死の森”から通うのは大変じゃから里の中で暮らしてくれんか？」

那路「里の中で…」

乃衣「…分かりました…」

火影「おお…良かった…そうじゃ！カカシ…もう少しの間一緒に住んでやってくれんか？」

カカシ「…良いですよ」

那路・乃衣「やった！」

二人は手を取り合って喜んだ。

火影「カカシ…好かれたのう」

カカシ「まあ…そうですね…」

カカシ「おはよ？那路・乃衣…今日から…里に引っ越しただけ…用意出来た？」

那路「うん…出来た」

乃衣「…まあ…巻物に入れたから…カカシ兄さんは？出来た？」

カカシ「確かに…出来てるよ…じゃあ…行くか」

那路・乃衣「はい！」

三人は瞬身の術で里に向かった。

里に到着し火影の用意してくれたアパートに行く…私は途中で八百屋と魚屋、肉屋に寄り道し買い物済ませた。

カカシ兄さんは刃物屋？に行き包丁、鋏、伽石…とか多分調理道具を数点買っていたようだ…那路は…スーパーとかいうところに寄り…ラーメンを数点買ってきた…まあ…麺だけで…具材は買っていないかった。

乃衣「那路…具材は？」

那路「え…買ってないよ…」

カカシ「…まあ…後日スープ買って…具材は…乃衣が買った野菜で
良いんじゃない？」

那路「乃衣…ダメ？」

乃衣「…分かったよ」

那路「ありがとう乃衣…」

アパートに着き、巻物を出し、衣類・家具・その他の物を出してい
く。

那路「…はい…これで…おしまい」

カカシ「那路の方は終わったか…乃衣は？」

乃衣「もうちょい…終わった！」

三人は引越しを終え、火影様に挨拶に行った。

火影様の屋敷に着くと…

火影「おお…よく来たのう」

那路「火影様、こんにちは」

乃衣「こんにちは、火影様」

カカシ「どうも…今、引越しが終わったので挨拶に来ました…ん
？その人は？」

火影様の横には顔に一本傷の付いた男だった。

火影「那路・乃衣…お主らの担任の先生じゃ」

男「海野 イルカです」

那路・乃衣「宜しくお願いします」

イルカ「えっと…男の子の方が…山守 那路君で女の子は…山守

乃衣さんでしたね」

那路・乃衣「はい！」

イルカ「横にいる人は…？」

カカシ「あ…この子達は両親が居なくてな…俺が親代わりだ…は
たけ カカシ」

イルカ「両親がいない…」

乃衣「…事故死です！でも、カカシ兄さんが私たちを引き取ってくれたので、別に両親がいない事にはなんとも思っていないです」

那路「俺も！カカシ兄さんと乃衣がいれば別に気にならない」

イルカ「…そうか」

イルカ先生は少し悲しそうにしていた。

三人は里の住民登録をし終えた。

火影「では…那路・乃衣明日からアカデミーに通ってくれるのう」

那路・乃衣「はい！火影様！」

カカシ「では…失礼します」

三人は屋敷からアパートへ帰っていった。

4・転校と約束と…

カカシ「そういえば…二人とも…お前たち転校生って事になってるみたいだから」

那路「え？そうなの？」

乃衣「…それで何処からって事に？」

カカシ「まあ…波の国」

那路「あれ？忍者いないよね？」

乃衣「確かに…カカシ兄さんが前に教えてくれたじゃん！」

カカシ「まあ…そうなんだけど…火影様がそういう風に登録したの…」

乃衣「…まあ…そうだったのなら仕方ありませんね」

那路「なあ…カカシ兄さんはこれからどうするの？暗部に？」

カカシ「…まあね」

那路・乃衣「了解！」

三人はアパートに戻り、那路・乃衣は明日からアカデミーに転校する準備をした。

翌日、アカデミーの職員室に行きイルカ先生のところへ行く。

イルカ「おはよう、二人とも」

那路・乃衣「おはようございます」

イルカ先生と教室に向かう。

イルカ「おはよう！皆！昨日帰りに言っていた転校生を紹介する…入っておいで」

那路「波の国から来ました…ヤマモリ山守ナル那路です」

乃衣「同じく波の国から来ました…ヤマモリ山守ノイ乃衣です」

イルカ「皆、仲良くする様に！」

紹介されて席に座る。

那路「…」

乃衣「…」

休憩時間にクラスの人から質問攻めを受けたが…全て無視した二人。

那路「乃衣…行こ」

乃衣「うん…那路」

私たちはクラスから離れて屋上へ足を運んだ。

屋上に着くと…

那路「…あー…なんで質問攻めになんの？」

乃衣「好奇心でしょ？」

那路「…でも、煩くない？」

乃衣「煩かった…明日は声かけてくるかな？」

那路「かけてきても無視」

乃衣「そうだね…疲れるし」

二人はブーツと空を見上げた。

那路・乃衣「空は良いな」

二人が空を見上げていると声をかけられた。

？「あ！先客！」

振り向くとダルそうに頭をかく少年とお菓子を頬張る少年が立っていた。

？「ん？お前ら転校生の？…俺…奈良シカマル…そこ…良い風吹いてるだろ？」

？「こ、こんにちは…僕…秋道チョウジ…シカマル…邪魔したら悪いよ？」

那路・乃衣「…宜しく」

チョウジ「宜しくね…こ、これ良かったらどうぞ？」

チョウジは持っていたお菓子を差し出す。

那路「…いや…良いよ…でも、ありがとう」

那路・乃衣は無視をせず二人に言葉を交わした。

乃衣「…此处は…本当に良い風が吹くね…」

シカマル「だろ？俺さあ…入学式ダルくて此处でサボったんだ！」

チョウジ「…シカマル」

那路「サボりに？バレなかったのか？」

シカマル「お袋にバレた！で、ビンタ食らった」

シカマルは笑いながら話す。

それから四人は休憩時間ずっと空を眺めていた。

休憩時間が終り教室に戻ると授業が始まったが、那路・乃衣にとっては暇な時間だった。

アカデミーのカリキュラムはカカシ兄さんとの修行で済んでいたからだ。

那路（…乃衣…眠い）

乃衣（我慢しなさい！那路）

那路（は〜い）

心読の術で二人は授業中会話していた。

授業が全て終り帰りの支度をしているとシカマルとチョウジが話かけてきた。

シカマル「この後、時間あるか？」

チョウジ「…里が見渡せる場所に行こ？」

シカマルとチョウジは誘いに来たらしい。

乃衣「良いよ…でも…何処で待ち合わせる？」

シカマル「商店街…場所分かるか？」

乃衣「うん…分かる」

チョウジ「その商店街に花屋”花・やまなか”があるんだけど…その前はどうか？」

乃衣「…わ、分かった…後で那路と行く…」

シカマル「ああ」

チョウジ「じゃあまたね」

二人は教室から出て行く。

那路「乃衣…」

乃衣「ん？那路どうしたの？」

那路「いや…帰ろうか？」

乃衣「うん」

二人はアパートへ帰っていった。

アカデミーの授業が終わり、待合せ場所にいった二人はただ、黙って花を見ていた。

？「お使いかい？」

店の店員と思われる男が話しかけて来た。

乃衣「友達と待合せです」

乃衣は花を見ながら答えた。

？「そう…君はお花好きかい？」

乃衣「…普通です」

？「…そうか」

那路「…あ！友達が来たので」

シカマル「…お待たせ！」

チョウジ「…はあ…はあ…お待たせ…二人とも…」

シカマルとチョウジは走ってきたようだ。

？「おお！シカマル君にチョウジ君！」

シカマル「いのいちおじさん、どうも」

チョウジ「こんにちは…おじさん」

いのいち「二人の友達かい？」

シカマル「はい…今日、転校してきた二人です」

いのいち「そうか…二人もと宜しくね」

いのいちと呼ばれた男は那路・乃衣に笑顔を見せる。

那路「どうも」

乃衣「…どうも」

乃衣は…居心地の悪い気がしていた。

シカマル「おじさん…ハナいる？」

いのいち「いるよ…ハナ！シカマル君たちが来たよ！」

ハナ「はい！」

奥から自分たちより小さい子が出て来た。

乃衣「…」

いのいち「私の愛娘・ハナだ…ハナ挨拶は？」

ハナ「山中ハナです！宜しくね！」

那路「ああ…宜しく」

乃衣「宜しく」

シカマル「じゃあ行くか！」

チヨウジ「そうだね！」

ハナ「ハナも行く！」

いのいち「シカマル君、ハナを宜しく」

シカマル「…はい」

半ば押し付けられた感じにハナも付いてくるようになった。

ハナ「お姉ちゃん…名前なんて言うの？」

ハナは乃衣に話しかけるが、乃衣は無視していた。

那路「…ごめんな…今ちよつと気分悪いらしい…シカマルとチヨウ

ジ…今日誘ってくれてありがとう…悪いけど俺ら帰る」

シカマル「…そっか…じゃあ…また誘ってやるからその時は…宜しくな」

チヨウジ「またね…二人とも」

那路はそう言い乃衣の手を引っ張ってアパートへ帰っていった。

花・やまなかから帰ってきた二人はアパートの部屋からブーツとし

ていた。

那路「…」

乃衣「…お腹」

乃衣は小さく呟く。

那路「ん？」

乃衣「減った」

そう言うとな衣のお腹が小さく鳴った。

那路「…何食べたい？」

乃衣「…プチトマト」

那路「…冷蔵庫見てくる」

そう言い立ち上がる那路。冷蔵庫を開けプチトマトを探す。

那路「…無い」

そう小さく呟く。

那路「買ってくる」

那路は玄関に行こうとしたが、乃衣はそれを阻んだ。

那路「乃衣？」

乃衣「あるモノで良い」

那路「ラーメンでも？」

乃衣「…うん」

那路はラーメンを作り始めた。

二人でラーメンを啜りながら、乃衣は自分自身で考え始めた。

乃衣（…山中ハナ…あれは…私の妹？…まあ…いのは死んでいるのだから…妹とは考えなきゃいい…でも…心の準備が…はあ…）

那路（乃衣…？）

乃衣は知らず知らずに心読の術を使っていた。

食事が終り二人でボーツとしているとカカシ兄さんが任務から帰ってきた。

乃衣の様子を見るなりカカシ兄さんは那路に今日の事を聞いた。

那路から事情を聞くとカカシ兄さんは黙って乃衣の頭を撫でた。

それだけで乃衣は良かったようだ。

カカシ「…乃衣、辛い時は辛いつて言っていていいからな…俺や那路はずっと乃衣の側にいるんだから…」

乃衣「うん…ありがとう…カカシ兄さん…那路も心配かけてごめんね」

那路「いいよ…乃衣」

その日、三人は小の字になって休んだ。

5 ・ うちとはと…小声

あれから時が経ち、那路・乃衣は散歩をしていた。

乃衣は自分自身の気持ちを瞑想時に考えたり、カカシ兄さんや那路に相談したりし、今はもう落ち着いていた。

那路「…ん？あれ？…乃衣」

乃衣「何？那路」

那路「なんか向こう側…燃えてる？」

乃衣「え？」

那路に言われ其方を見ると、燃えていた。

燃えている場所に着くと…其処は…。

那路「此処つてうちなの？」

乃衣「ええ」

？「君たちは…？」

不意に声をかけられた。

那路「っ！？貴方は！」

乃衣「…誰？」

那路「え？乃衣…この人サスケ…だっけ？彼奴の兄貴じゃん！」

乃衣「へえ、興味無いから忘れてた…ふん…その人が何やってんの？」

？「忘れてたか…まあ…良い…僕はこれからこの里を抜ける」

乃衣「へえ…で？」

？「君たちにサスケを頼みたいんだけど…」

乃衣「…嫌だね！火影様にでも頼んだら？」

那路「…ハッキリ言い過ぎだよ？…まあ…俺も乃衣に賛成だけど…」

？「君たちに頼みたいんだけど…本当にダメそうだね」

那路・乃衣「ダメ！」

私と那路はそう言い、その場から離れた。

あの後、サスケもサスケ兄から何か聞いたらしいが…興味無いので放置。

翌日、うちは一族はサスケを残し壊滅したという噂が経った。
クラスの空気も一段と悪くなった。

後から人に聞いたが、サスケは兄責を恨んでいるらしい。

那路「…乃衣」

乃衣「何？那路？」

那路「うちはは…聞いていないのかな？」

乃衣「みたいだよ…まあ…火影様の考えに従うまでだけどね…」

那路「そうだね」

那路・乃衣は…サスケの様子を見ながら小声で話をしていた。

6・アカデミー卒業試験とミズキの暗躍？

アカデミーに行く前に二人は…瞑想して集中を高めていった。

カカシ「二人とも…もうそろそろ時間でしょ？」

那路「はい！」

乃衣「はい…那路…行こか？…あ！今日はカカシ兄さんは任務中？」

カカシ「いや…任務じゃ無いが…火影様に呼ばれている」

那路「そっか…あ！今日、夕飯何が良い？」

乃衣「具沢山のやさいスープとやさいスティック」

那路「やさいオンリー？」

乃衣「…お魚」

そんな会話をしながらアカデミーに行く準備を終えた。

アカデミーに行くとサスケが一人で屋上に立っていた。

サスケ「…」

私と那路はそれを見かけただけで後は放置した。

教室に行くと、シカマルとチョウジが何か話していた。

那路「おはよう」

乃衣「おはよう」

シカマル・チョウジ「おはよう」

那路「何の話してたの？」

乃衣「…」

シカマル「いやあ…サスケさあ…最近屋上にいるから…どうする？
って話」

チョウジ「流石に校舎裏はね」

那路・乃衣「ああ」

イルカ「皆！おはよう！昨日伝えていた卒業試験を今日は行っから

！…試験は分身の術！…呼ばれた者から隣の教室にくる様に！」
卒業試験が始まった。

猪鹿蝶トリオ、感知系トリオ、クラストップコンビ、那路・乃衣は試験に合格した。

那路・乃衣は試験官のミズキ先生のおかしいのに気付いた。

那路「…なんかあるね？」

乃衣「うん…カカシ兄さんに伝えよう」

那路「ああ」

ミズキ先生のおかしいという事をカカシ兄さんに伝え、火影様に連絡すると、暗部数名が監視を行った。

すると、今日卒業試験で落ちた落ちこぼれ”^{フヤ}麩野 ^{リカイ} 鉦介”に禁術が書かれている巻物を教え、騒ぎを企んでいたようだった。

火影様はその事を知り、禁術の巻物を手元に置き、二セの巻物を倉庫に入れ様子を見た。

案の定、鉦介は二セの巻物を持って行った。

二セの巻物と知らずミズキは鉦介から巻物を奪い殺そうとしたが、監視していた暗部に殺害された。

余談だが…その時麩屋鉦介は、イルカ先生に額当てを貰ったようだ。

7・班決めと担当上忍と初任務

イルカ「これからスリーマンセルで行動する為に、班決めをするが、メンバーはこっちで決めたから！」

イルカ先生の言葉にブーイングが起こるが、イルカ先生はそれを無視して発表し始めた。

イルカ「…第七班…うちはサスケ、春野サクラ、麩屋鯉介…第八班…犬塚キバ、油女シノ、日向ヒナタ…第十班…山中八ナ、奈良シカマル、秋道チョウジ…第零班…山守乃衣、山守那路…以上！…第零班は人数の加減で二人だけだ！…担当上忍の指示に従いながら、行動するように！」

アスマ「第十班…来い」

紅「第八班…来て」

カカシ「第零班…行くぞ」

那路・乃衣「はい！」

私と那路の担当上忍はカカシ兄さんだった。

第七班を残し他の班は担当上忍に付いて教室を後にした。

私と那路、カカシ兄さん…改めカカシ先生は第四四演習場にいる。

那路「此处に来るのも久々だな！」

乃衣「…死の森」…懐かしいね」

カカシ「那路・乃衣！これからスリーマンセルで行動する為に演習をしたいと思っただけだ！お前たち二人の实力はもう知っているからな…どうする？」

那路「どうする？…って…合格で良いんじゃない？」

乃衣「…うん」

カカシ「だよな」

三人はその日、修行して終わった。

その翌日、第零班は…初任務を行った。

カカシ「お前たち二人には退屈かもしれないが…初任務は…マダム・しじみ様の飼い猫探しだ…」

那路「はい！」

乃衣「了解です…口寄せ・森蜘蛛」

乃衣は口寄せをし掌サイズの森蜘蛛を出した。

乃衣「森蜘蛛…飼い猫捕獲して！」

森蜘蛛「了解です…主」

乃衣「これで早く終わるか」と

カカシ「そうか」

その数分後、森蜘蛛から連絡あり、其処へ行くと、依頼の飼い猫と駄屋鉦介が捕獲されていた。

鉦介「あ！那路、乃衣！助けて！」

森蜘蛛「いきなり此奴が襲いかかって来ましたので…」

乃衣「飼い猫だけでいいから、糸を外して」

森蜘蛛「はい…主」

そう言い森蜘蛛は飼い猫の糸を外して消えていった。

鉦介「那路・乃衣助けて！」

外野は煩かったのでそのままにして瞬身の術で立ち去った。

任務の依頼を受ける場所に行くとマダム・しじみ様が飼い猫に抱きつきもう離さんとしていた。

任務が終りアパートへ戻る前に商店街に行くと、鉦介に見つかった。
鉦介「あ！那路・乃衣！なんで助けてくれなかったんだよ！」

那路「縄抜けの術したら？」

鉦介「…出来ない」

乃衣「忍者失格ね！」

鉦介「でも、友達なら助けてよ！」

那路・乃衣「友達じゃないから助けない！」

鉦介「え…友達じゃない…？」

カカシ「二人とも行くぞ」

那路・乃衣「はい！」

私と那路は鉦介を無視して買い物を済ませた。

その日、那路は花・やまなかで観葉植物を買い、乃衣はプチトマトの種を買った。

8・第零班と第七班と護衛任務

任務を聞きに火影様のトコロへ行くと第七班が何か文句を言っていたようだ。

火影「おお！第零班！良いとこに来たな！…お前たちは今日、護衛任務に言ってくれ！」

那路「え？護衛任務」

乃衣「了解です…誰を？」

鉦介「火影様！なんでこいつ等だけ護衛任務なの！」

火影「鉦介…お前たちより此奴らの方が良いからに決まっているだろ！」

鉦介「不公平だ！」

サスケ「確かに」

サクラ「そうね！」

火影様の言葉に反発する第七班の三人。

乃衣「…じゃあ合同で任務します」

火影「乃衣…良いのか？」

乃衣「はい…後で後悔するのは第七班だけですから」

火影「那路はどうじゃ？」

那路「…乃衣が良いなら俺は構いません。カカシ先生は？」

カカシ「まあ…乃衣と那路がそう言うので」

火影「そうか…では、第七班と第零班！合同で護衛任務を頼む…では、入って来てくだされ」

火影様がそう言うのと奥の部屋からおっさんが現れた。

？「なんじゃ？こんなチビどもで大丈夫か？」

鉦介「誰だチビは…って…俺？」

鉦介は周りを見て自分が一番チビな事に気づき、依頼人にクナイを

向けて騒いでいた。

火影「この方は波の国から来ている…タズナさんじゃ…タズナさん…上忍も付いているので安心して下され…」

那路・乃衣はタズナさんを見て何か感じ取ったようで火影様とカカシ先生に心読の術を使った。

那路（…火影様、タズナさん…護衛任務について…嘘を付いてる）

乃衣（…那路の言う通り…何か裏があります…）

火影（…そうか…では…第零班には特別裏任務を頼む）

那路・乃衣・カカシ（了解です）

「あ」「ん」と書かれた出入口？に集合する第零班と第七班と依頼人・タズナ。

鉦介「んじゃあ！出発！」

サクラ「なんであんたが号令かけるのよ！サスケ君なら兎も角！」

鉦介「サクラちゃん…それは無いって…」

鉦介はサクラに注意されて落ち込む。

第七班のメンバーを無視して第零班と依頼人・タズナは…先にスタスタ歩いていった。

サスケ「ウストラトンカチ…彼奴ら先に行ったぞ」

鉦介「え？…あ！」

鉦介が気付いた時には、結構距離が離れていた。

サスケ「行くぞ」

サクラ「そうね」

第零班のメンバーはタズナから任務について聞き出し納得した上である提案をした。

那路「タズナさんにはこの巻物に入ってもらいます…何があっても、危害はありませんから」

タズナ「うむ…分かった」

乃衣は分身体一人をタズナに化けさせ、那路は…タズナさんを巻物に入れた。

乃衣「…第七班のメンバー来た」

鉦介「那路・乃衣！まってくれてもいいだろ！」

那路・乃衣は第七班のメンバーを無視してカカシ先生に合図をした。

カカシ「…はあ…そういえば第七班は…どんな任務をしていたんだい？」

サクラ「飼い猫探しと農家の種まきのお手伝い、壁のペンキ塗りとかですね」

カカシ「じゃあ護衛任務は初めてなんだ？」

サクラ「はい…第零班は？」

カカシ「ん？護衛任務は2回かな…波の国にはもう1回言ってる…

まあ…木の葉に住む波の国出身の依頼人で墓参りにって…」

サクラ「じゃあ、どんな国が知っているんですか？」

カカシ「まあね」

鉦介「忍者はいんの？」

カカシ「いないよ…まあ…最近物騒らしいけどね…死人が出たりしてるし」

サクラ「…死人…」

サクラは言葉を失ったようだ。

那路は水溜りを見つけ、其処にあるモノを仕掛けた。

乃衣「…那路…それ」

那路「うん」

カカシ「はあ…予感的中ですか…乃衣・那路」

那路「了解！」

第零班のメンバーは第七班に聞こえないように話しをし、那路が行動した。

那路「ちよつと…トイレ行きたくなったから…先に行つといて…追

いつくし」

乃衣「分かった」

那路は木々の中へ入っていった。

サクラ「ちよつと！乃衣！女の子の前であんな事言って許すわけ？」

乃衣「…」

乃衣はサクラを無視し、カカシ先生と会話していた。

数分後、那路は戻って来た。

乃衣「おかえり」

那路「ただいま…ん？なんかあった？」

乃衣「特に無いけど…後ろの奴ら煩くてイライラする」

カカシ「乃衣…我慢」

乃衣「一応我慢も限界」

乃衣の言葉に那路とカカシ先生は口を噤む。

第七班に対しイラ立つ乃衣。

何故、乃衣イラ立つかそれは…那路がトイレの為に木々の中へ入っていった後になる。

サクラ「だいたい女の子の前で言うセリフ？少しは考えなさいよ！那路のヤツ！」

そう言い那路に対し文句を言うサクラ。

カカシ「まあ…君に言っただんじやないし…」

サクラ「はあ？第零班は何を考えているの？例え私に言っただけでも女の子の前で言うセリフじゃないです！」

カカシ「じゃあ君はサスケや鰐介が何も言わずいなくなっても気にとめないと？」

サクラ「え…それは…鰐介は兎も角…サスケ君がいなくなったら…気にとめます！」

鰐介「サクラちゃん…ヒドイ」

カカシ「君たちは良く合格したね」

カカシ先生はそう言い第七班の担当上忍を見る。

？「カカシ先生は…苦勞されていないようですね？」

カカシ「いえいえ…苦勞はしていますよ？」

？「そうは見えませんか？」

カカシ「そうですか…あ…そういえば名前聞いていませんでしたね？」

？「僕は劍屋^{ツルギヤ} 刃^ジです…カカシ先生」

カカシ「宜しく…ん？乃衣？」

カカシ先生と刃先生が会話している最中、私はサクラの発言とかにイラついていた。

その後、那路が戻ってきてても尚、サクラはグダグダと文句を言う。

乃衣「…クロス」

乃衣は那路とカカシ先生にしか聞こえない声で言う。

カカシ「我慢して…って限界なんだよね？」

那路「…乃衣…落ち着いて？」

那路とカカシ先生は乃衣を宥めるが乃衣は限界を達していて落ち着かない。

第零班がそんな状態の時に第七班はまだまだ黙る気配もない時だった。

乃衣・那路「!？」

カカシ「あ…みんな！頭を下げる！」

カカシ先生の言葉に第七班は頭を下げる。

しかし、乃衣は向かってくるモノを平然と手に取って投げてきた方角に投げ返した。

カカシ「乃衣…さん？」

那路「…あーあ…キレてる」

？「クツクツ…まさか投げ返されるとはな…」

サクラ「誰！」

？「俺か？俺は…桃地 再不斬…だ！」

乃衣「変な名前…」

那路「乃衣…」

再不斬「クックク…貴様ら…そのおっさんをこっちに渡せば…死ななくて済むぞ？」

鉋介「誰が渡すか！」

再不斬「じゃあ殺すまでの事」

カカシ「…乃衣」

乃衣「はい…影分身の術」

乃衣は影分身の術で自分を5体程出した。

分身体は再不斬に向かい体術をかけていく。

本体は印を組み次の技をかける準備をする。

乃衣「…口寄せ・蝶蛾」

口寄せをすると大量の蝶蛾が舞い再不斬に襲い幻術をかける。

乃衣「…口寄せ・森蜘蛛」

再不斬に目掛けて糸を吐き捕獲体制を取っていった。

乃衣「捕獲完了」

那路「んじゃあ…はい…コレ！」

乃衣「ありがとう」

那路は乃衣に巻物を渡し、乃衣はその巻物に捕獲物を入れる。

因みにタズナが入った巻物ではありません。

カカシ「じゃあ、行きますか」

那路・乃衣「はい！」

第零班は第七班を置いて先に進む。

第零班の行動を見た第七班はライバル視をしているようだ。

鉋介「なあなあ！乃衣ってどうやって口寄せしたんだ？」

サクラ「隠さずに教えなさいよ！」

サスケ「勝負しろ！」

まあ…最後の言葉は無いな…サスケ。

第零班は力カシ先生含めて、第七班をガン無視した。

サクラ「ちよつと！無視してんじゃないわよ！ねえ…乃衣！」

サクラの言葉に乃衣は再不斬が持っていた…巨大首斬り包丁を平然と持ち…サクラ目掛けて投げた。

サクラ「きゃあ！」

サクラ寸前のところで避けた。

乃衣「っち！外した…次、話しかけたらクロス」

乃衣は殺気を第七班に向けて…巨大首斬り包丁を背負う。

那路・力カシ先生「…」

刃先生「力カシ先生の生徒さんはデンジャラスだね」

刃先生は呑気に笑っていた。

第七班の刃先生以外のメンバーは乃衣の殺気で冷や汗をかきながらついて行った。

乃衣「那路…あの仕掛けは？」

那路「ん？成功して…捕まえたよ？確か…再不斬が入った巻物に…」
力カシ「ああ…水溜りのアレな…一緒に入れて大丈夫か？」

那路「まあ…両方水遁使いだし、大丈夫でしょ？」

乃衣「…コロせば良いのに…」

那路「まあ…拷問のあの人に渡すから…ね？」

乃衣「そう」

那路の言葉に納得した乃衣。

拷問のあの人は何度か力カシ先生に会わせて貰っていた。

まあ…またいずれ会えるだろう。

波の国に到着し第七班をタズナの家に行かせ、第零班はガトーのアジトへ行った。

那路「…じゃあ始めますか？」

乃衣「ええ…口寄せ・蝶蛾…」

また乃衣は口寄せをし、アジト内部に幻術をかけて行く。

カカシ「あれ…えっと…木遁しといて？」

乃衣「はい…木遁秘術・樹海降誕」

乃衣はアジトの周りを樹々で覆った。

カカシ「よし！行くぞ！二人とも！」

那路・乃衣「はい！」

第零班はアジト内部に忍びこんだ。

内部に入ると、敵は幻術にかけられていた。

カカシ「で…どうする？」

乃衣「さらし首」

那路「了解」

那路は乃衣の言葉にアジトにいるガトーの手下たちの首を切って一箇所に集めた。

カカシ「こうして見ると…エゲツない絵になるね？」

乃衣「ガトーの首は？」

那路「まだ無いね？」

カカシ「まさか逃げた？」

乃衣「…タズナさんたちのトコに戻ろう」

那路「だな…カカシ先生…行こ」

カカシ「ああ」

三人はタズナの家に向かった。

タズナの家にいた第七班は第零班の話をしていた。

鉦介「なあなあ！なんで無視られんのかな？」

サクラ「あんたが嫌いからじゃないの？」

鉦介「サクラちゃん…ヒドイ」

サクラ「だってサスケ君は話しかけてないし…あんただけでしょ？」
サスケ「お前も話しかけていただらう？」

刃先生「まあまあ…本人たちに聞けば良いんじゃないか？」
サクラ「無視られんのにですか？」

刃先生「…じゃあ、カカシ先生にでも聞いて見たら？」

サクラ「なるほど！じゃあ第零班が帰ってきたら、カカシ先生に聞きましよう！」

第七班がそんな話をしているとは知らずに第零班はタズナの家に…。

乃衣「…カカシ先生…橋に行きましよう…」

カカシ「ああ」

那路「なんかありそう？」

乃衣「うん」

タズナの家に向かう途中で進路変更した乃衣たち第零班。

橋に行くと、ガトーやその手下たちがタズナの仲間たちを殺していた。

那路「…的中？」

カカシ「だな…」

乃衣「那路…宜しく」

那路「了解…口寄せ・九狐…」

那路は九尾の力を使い、ガトーの手下たちを殺していった。
そして…ガトーの首と手下たちの首を橋でさらし首にした。

那路「…終り」

カカシ「再不斬の首は？」

乃衣「アレか…霧隠れに返品？」

カカシ「…ダメじゃないか？…拷問のあの人に渡そう」

那路・乃衣「了解」

カカシ「…タズナさんの家に行くか？」

乃衣「…いや、里に帰ろう…任務は終わりましたから」

那路・カカシ「了解」

第零班は第七班に内緒で里に帰っていった。

第七班は橋に行き悲鳴をあげていたのは…別の話。

9・拷問と刀と推薦？

第七班と合同護衛任務を終え一足先に里に戻った第零班のメンバー。火影様に今回の護衛任務の内容や詳細を伝えた後、拷問の行われる場所へ向かった。

拷問のエキスパートのあの人は火影様からの連絡により門の前で待っていてくれた。

カカシ「イビキさん…お待たせしました」

イビキ「カカシ、那路、乃衣…待っていた…桃地 再不斬の身柄を確保したようだな」

那路「はい…この巻物に確保していますが、おまけのザコ忍も二人入っています」

イビキ「そうか…ありがとう…それは此方で預かるとしよう」

那路「はい…お願いします」

那路はイビキに巻物を渡し、第零班のメンバーは帰っていった。

乃衣は巨大首斬り包丁を背負ったまま。

アパートに戻り巨大首斬り包丁を部屋に飾る乃衣。

那路「それ…どうするの？」

乃衣「使う」

那路「重くない？」

乃衣「重い」

那路「加工してみたら？」

乃衣「加工…うん…してみる」

数時間後巨大首斬り包丁は日本刀に姿を変えた。

乃衣はそれを背負うように装備した。

乃衣「どう？」

那路「良いと思う…刀の名前は…決めたの？」

乃衣「…流鏑馬^{ヤブサメ}」

那路「カツコ良い名前じゃん！」

乃衣「ありがとう…那路…もう一つは…那路にあげる」

乃衣はもう一つの日本刀を那路に渡した。

那路「ありがとう…乃衣…二つ出来たの？」

乃衣「三つ出来たの…もう一つはカカシ先生に」

那路「そっか…この日本刀にも名前付けて？」

乃衣「蓬吟刀^{ホウギントウ}」

那路「おっ！良いじゃん！ありがとう…乃衣…大切にに使わせて貰う」
乃衣「うん」

その後、カカシ先生にも日本刀を渡したが…また乃衣が刀に名前を付けた。

カカシ先生の日本刀の名前は…「^{ギシントウ}技人刀」

まあ…カカシ先生には簡単な名前になったが…カカシ先生は割と嬉しそうにしていた。

合同護衛任務からだいぶ期間が空いた日、カカシ先生からある話を聞いた。

カカシ「そういえば…中忍試験に推薦したからな！二人とも！」

那路「え？…中忍試験…」

乃衣「分かりました」

10・主人公的二人のデータ

ヤマモリ
山守 乃衣

(元・山中 いの)

冷静沈着で短気

ヤブサメ
日本刀・流鏑馬

口寄せ・蝶蛾(幻術用)

口寄せ・森蜘蛛(捕獲・罾用)

ヤマモリ
山守 那路

(元・うずまき ナルト)

ちよつと天然だが冷静沈着

ホウギントウ
日本刀・蓬吟刀

口寄せ・九狐(攻撃用)

九尾の狐の力を借りる。

口寄せ・孔雀(幻術用)

二人は似た技を使う。

アカデミーでの成績は…サスケとサクラより優秀だったが、目立ちたくなかったので、手を抜いていた。

師匠ははたけ カカシ(第零班の担当上忍)

クラスでは基本的に二人で過ごすか…シカマルやチョウジと過ごす事が多い。

基本使用技一覧

心読の術
影分身の術
掌仙術
瞬身の術
遠眼鏡の術
呪印術
呪印術・解
狐狸心中の術
木遁秘術・樹海降誕
その他多数。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9370y/>

表死された二人(改)

2011年11月28日01時52分発行